



**Data**

監督・脚本：アスガー・ファルハディ

イ：

出演：ペネロペ・クルス/ハビエル・バルデム/リカルド・ダリン/エドゥアルド・フェルナンデス/ラモン・バレア/バルバラ・レニー/インマ・クエスタ/カルラ・カンブラ/ロジェール・カサマジョール/エルビラ・ミンゲス/サラ・サラモ/ホセ・アンヘル・エヒド

## 👁️👁️ みどころ

イランのアスガー・ファルハディ監督は、『セールスマン』(16年)で2度目のアカデミー賞外国語映画賞を受賞したにもかかわらず、トランプ大統領の「入国禁止令」に抗議して授賞式をボイコットしたが、本業はきっちりとし、まして、『誰もがそれを知っている』(英題はEVERYBODY KNOW)とは一体ナニ？

スペインの田舎村での結婚式にファミリーが集う導入部は、『ゴッドファーザー』(72年)のドン・コルレオーネの末娘の結婚式にファミリーが集うシークエンスを彷彿させるが、もちろん規模や贅沢さは全く違う。また、『ゴッドファーザー』では、その後、暗殺、暗殺の血なまぐさい事件が相次いだが、本作では誘拐事件が勃発！

すると、本作は『64-ロクヨン-前編』(16年)『64-ロクヨン-後編』(16年)や『ゲティ家の身代金』(17年)と同じようなスリリングな展開に…？ いやいや、それは全くなし。本作は、アスガー・ファルハディ監督いつもの“家族の秘密”を巡るあっと驚く展開になっていくので、それに注目！ もちろん、“ネタバレ厳禁”だから、本作についてはこの評論を読むだけでなく、あなた自身の目でしっかりスクリーン上での確認を！

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■アスガー・ファルハディ監督作は5作連続で星5つ！■□■

私がイランのアスガー・ファルハディ監督の名前をはじめて知ったのは、『彼女が消えた浜辺』(09年)を観た時。もっとも、そこでは、日本初、極上の密室型推理劇だった『キサラギ』(07年)、『シネマ12』(61頁)と同じような、日本では珍しいイラン初、極上の密

室型推理劇として大いに楽しただけで、監督の名前は特に意識していなかった（『シネマ 25』 83 頁）。また、同作のそれは『キサラギ』のような文字どおりの密室ではなく、イランの首都テヘランの北にあるカスピ海の海辺の別荘地だった。しかし、同監督の第2作『別離』（11年）が第6回ベルリン国際映画祭金熊賞、銀熊賞の他、第8回アカデミー賞外国語映画賞まで受賞すると、アスガー・ファルハディ監督の名前は自然に私の頭の中にインプットされた（『シネマ 28』 68 頁）。

そのため、続く第3作『ある過去の行方』（13年）では、私は「あのイラン人監督に三たび注目！」と書いたうえ、「人間感情のドロドロ感が満載！その1、その2、その3」を中心とする評論を書いた（『シネマ 33』 113 頁）。更に、第4作『セールスマン』（16年）は、第8回アカデミー賞外国語映画賞を受賞したにもかかわらず、トランプ大統領の入国禁止令に抗議してアスガー・ファルハディ監督と主演女優が授賞式への出席をボイコットしたことが大きな話題を呼んだ。同作は、同じイラン人監督ジャッフル・パナピの風刺にみちた『人生タクシー』（15年）（『シネマ 40』 78 頁）とあわせて観ればより一層面白い、超一級のサスペンス人間ドラマだった。（『シネマ 40』 20 頁）。

このように、アスガー・ファルハディ監督作品は過去4作続けて傑作揃いで、私はそのすべてに星5つを付けていたが、今回の『誰もがそれを知っている』も星5つ。私が、小学生時代に流行った歌に平尾昌章が歌った『星は何でも知っている』というラブソング(?)があったが、本作の邦題『誰もがそれを知っている』（英題も EVERYBODY KNOW）とは一体ナニ？アスガー・ファルハディ監督作品はタイトルだけでは何の映画かサッパリわからないものが多い。本作について、私は例外的に予備知識を全く持たないで映画館に行ったからなおさらだ。さあ、アスガー・ファルハディ監督の第5作は連続して星5つの評価になるのだろうか？

## ■□■舞台はスペイン。華やかな結婚式にファミリーが集結！■□■

これ以上のギャング映画は存在しないと断言できる壮大な叙事詩が『ゴッドファーザー』（72年）だが、その導入部はイタリアマフィア。ドン・コルレオーネの末娘の結婚式に“ファミリー”が集結する物語から始まった（『シネマ 22』 未掲載）。それと同じように、本作も三女アナ（インマ・クエスタ）の結婚式のために、“ファミリー”がスペインの田舎に集結するところからスタートする。ドン・コルレオーネのファミリーはニューヨークに拠点を構え、広大なお屋敷で暮していたが、本作のスペインの片田舎で今回結婚式を挙げる三女アナの父親アントニオ（ラモン・バレア）はかなり年老いているうえ、それほど裕福ではなさそうだ。長女のマリアナ（エルビラ・ミンガス）は地元の男フェルナンド（エドゥアルド・フェルナンデス）と結婚して父親のアントニオと同居していたが、次女のラウラ（ペネロペ・クルス）は故郷を出てアルゼンチンでアレハンドロ（リカルド・ダリン）と結婚していた。

したがって、今が思春期真っ盛りの娘イレーネ（カルラ・カンブラ）とまだ幼い男の子を連れて、ラウラがスペインの故郷に戻るのはずいぶん久しぶりだ。実家に到着したラウラは両親や姉、妹たちと懐かしそうに抱擁を交わしたうえ、幼なじみのパコ（ハビエル・バルデム）とも久しぶりの再会を果たすことに。パコはかつて使用人だったが、ラウラの一族から譲り受けた土地をブドウ園に改良し、今はワイナリー経営者として成功を収めている男。また、今は美しい妻ベア（バルバラ・レニー）と一緒にだが、かつてこの村ではパコとラウラが恋人同士だったことは村の誰もが知っている周知の事実だったらしい。

『ゴッドファーザー』で見たドン・コルレオーネの末娘の結婚式はファミリーが勢揃いした大規模で華やかなものだったが、本作の三女アナとジョアン（ロジェール・カサマジヨール）との結婚式も、自宅の中庭をメインとしたものながら、それなりの規模でそれなりに華やか。陽気なスペイン人特有の飲めや歌えの風景とフラメンコ風の踊りが続く宴はいつ終わるかも知れないものだった。そんな中、突然停電になったり、雨が降り出したり、更にそれまでタップリ飲んで歌って騒いでいたイレーネが急に気分が悪いと言い始めたため、部屋に連れて行かれたり……。いつの間にか、その結婚式にはどこか不穏な雰囲気がある。

## ■□■誘拐事件が勃発！警察への通報は？■□■

寝ているはずのイレーネの部屋をノックしても中から返事がないばかりか、中からカギがかかっていたから、何かヘン。そう感じたラウラは大声で名を呼びながら家の中でイレーネを探したが、やっぱり返事はない。そんな中、ラウラのケータイに「娘を誘拐した。警察に知らせたら殺す。」と書かれたメールが届いたから、ラウラはビックリ。久しぶりに戻ってきたスペインの実家で我が子イレーネが誘拐されたことに激しく取り乱すラウラを前に、パコ、ベア、フェルナンドは冷静に事態を分析しようとしたが、こんな事態の中、最大のポイントは警察に通報すべきか否かだ。

誘拐事件をテーマにした名作は多い。邦画では、古くは黒澤明監督の『天国と地獄』（63年）、新しくは頼々敬久監督の『64-ロクヨン-前編』（16年）（『シネマ38』10頁）、『64-ロクヨン-後編』（16年）（『シネマ38』17頁）がその代表だ。また、最近の注目作が、リドリー・スコット監督の『ゲティ家の身代金』（17年）（『シネマ42』172頁）だった。これらはいずれも、誘拐事件を警察に通報したうえで、身代金の受け渡しと被害者の救出、犯人の逮捕がスリリングな展開を見せる名作だったが、本作にはその手の描写は全くない。他方、4月30日にみた『幸福なラザロ』（17年）の誘拐は、最初から狂言であることを観客に明示していた。アスガー・ファルハディ監督は本作でも「ひょっとして狂言誘拐？」と思わせるシーンも演出しているが、さて実際は？

本作冒頭には新聞記事をはさみで切り抜くシークエンスが登場するが、冒頭ではその意味は全くわからない。それがわかるのは、誘拐されたイレーネのベッドの上に、何年か前

に地元で起きた少女の誘拐事件を報じる新聞記事の切り抜きが残されていたためだ。この誘拐事件の被害者の少女は犯人に殺されていたから、これは誘拐犯からの「警察に通報すればイレーネの命はないぞ。」という警告であることは明らかだ。

そんなプレッシャーの前に、慎重を期して警察への通報を思いとどまるようにパコが提案したのは仕方ない。したがって、本作は誘拐事件でありながら、警察も新聞記者も全く登場しないかなり異質な映画になっている。しかして、誘拐事件で警察に通報せず、ファミリーだけの知恵でコトにあたることの是非は・・・？

## ■□■ 30万ユーロの要求にどう対処？なぜパコはここまで？ ■□■

アスガー・ファルハディ監督は、本作導入部にワイナリーの経営を成功させたパコが、ワインの作り方について小学生に講義するシークエンスを登場させている。そこでパコは、「搾りたての果汁とこのワイン、2つの違いはどこにあるかわかるかい？」と質問し、「その答えは時間だ」と自ら回答している。本作では誘拐犯との交渉シーンは全く登場しないが、2度目のメールで30万ユーロを要求してきた誘拐犯との対応には、当然時間の要素が大切になるはずだ。

30万ユーロの身代金要求に対しては、協力を求めたフェルナンドの友人である元警官ホルヘ（ホセ・アンヘル・エヒド）の、「身代金を用意しているふりをするんだ。犯人は間違いなく、あなたたちを見張っている。」との助言がポイントになってくる。本作のような状況下で時間をかせぐことにどれだけ意味があるのかは私にもわからないが、パコはその助言に従って、ワイナリーの共同経営者の元を訪れ、土地を含む自分の経営権の持ち分を売りたいと申出ること。しかし、これはホルヘのアドバイスに従った、ポーズだけの話？もちろん、そんな申し出を聞いた共同経営者はパコの申し出を真剣に受け止めるはずだから、彼がもしその申し出を受け入れたら、実はその話は金を準備しているといううわさを広げるための狂言だったとは言えないから、ひょうたんからコマの展開となり、パコはホントにワイナリーの経営権を失ってしまうことは明らかだ。いくら旧友ラウラの娘イレーネの誘拐事件への協力とはいえ、なぜパコはそこまでするの？

本作は、アスガー・ファルハディ監督が15年前にスペイン南部を旅した時に、誘拐された子供の話を聞いて最初のアイデアが浮かび、その後何年もアイデアを温めたうえ、満を持して自ら本作の脚本を書いたらしい。したがって、実際に夫婦関係にある、スペインを代表する俳優ペネロペ・クルスとハビエル・バルデムを起用したうえで、2人は昔の恋人同士ながら、今はそれぞれ別々の夫アレハンドロと妻ベアを持つ立場に設定したのも、それなりの深慮遠謀がありそうだ。また、ラウラの夫アレハンドロはアナの結婚式に出席せず、アルゼンチンに残っていたが、それはなぜ？ファミリーが揃っている時には登場させず、イレーネの誘拐事件が勃発した時点から遅れて登場してきたアレハンドロが、以前は裕福だったにもかかわらず、現在は失業中で飲酒癖の過去があったことをホルヘとフェ

ルナンドが知ると、彼らはアレハンドロが本件の犯行に関わっているのではないかと不審の目を向け始めたから、さあ、話はこんがらがってくることに・・・。

## ■□■あの件も？この件も？疑惑が疑惑を！■□■

日本では1945年の戦後改革によって廃止された小作制度（分益小作制度）が、イタリアでは1982年になってやっと廃止されたという驚くべきニュースを『幸福なラザロ』を観てはじめて知ったが、本作を観ていると、土地を買い取って今はワイナリーを成功させている元使用人だったパコと、土地を売って今は貧乏生活に陥っているラウラの父親との対比にも人間関係のアヤがありそうだ。もちろん、パコは金に困っていたラウラの父親から正当な商取引、正当な価格で土地を買い取ったのだが、誇り高き（ひがみっぼい？）ラウラの父親は、今ではそれを人の弱みにつけ込んで安値で買いたたかれたと考えているらしい。もちろん、何ゴトもなければそんな微妙な人間関係のアヤが表面に出ることはないのだが、30万ユーロの身代金を準備するべくパコがいろいろと動き始めると、人それぞれの思惑が微妙に交錯してくることに・・・。

それは、スペインに赴くや否や、思いもかけない“疑惑”に晒されたアレハンドロも同じだ。そのためアレハンドロは、「イレーネは私の娘だ。どうするかは私が決める！」と激昂したが、金には無縁で身代金を用立てる術もない無力な今の彼は、娘の帰還を神に祈るしかなかったから、妻のラウラはイライラ・・・？それによって、たちまち身代金の準備ができそうなパコに対するラウラの協力要請（要求？）が強まることになったが、それは正当なの？さらに、パコがラウラの言うがままにワイナリーの経営権を売ってまで身代金の準備に協力している姿を見た妻のベアは、どう思うの？パコがそんなに協力するのは、今でも夫がラウラに気があるからなのでは・・・？ベアがそう考えたのは当然だし、現にパコはラウラに今でも未練が残っているのかも・・・？

そんな風に、久しぶりに集まったファミリーの中では、昔を蒸し返しては、あの件も？この件も？となったうえ、疑惑が疑惑を生む事態に。そんな状況下、意を決したように一人でパコの元を訪れたラウラは、ハッキリお金の準備のお願い（要求？）をするとともに、あっと驚く“ある告白”を！

## ■□■あっと驚く“ある告白”とは？それはネタバレし厳禁！■□■

本作のパンフレットには、a.小竹由美子氏（翻訳者）の「誰もが互いの過去を知っている小さな村で、事件は起こる」、b.松崎健夫氏（映画評論家）の「視線によってフェルハディが描くふたつの異なる感情」、c.今祥枝氏（映画ライター）の「巨匠が新境地で描く“最も近い他人”の真実　そして、己のルーツを舞台に躍動するスター夫婦の共演」という3つのそれぞれの視点からの面白い「COLUMN」がある。もちろん、本作のパンフレットには、イントロダクションがあり、ストーリー紹介があり、製作スタッフと俳優たちの解説

があるが、そこでは巧妙に本作後半に訪れるパコとラウラの二人だけの場面で、ラウラの口から直接語られる、あっと驚く“ある告白”の内容には触れていない。なぜなら、それは“ネタバレ厳禁”とされている、本作最大のポイントだからだ。ところが、上記コラムcだけは、ある告白の中身をバラしているから、アレレ・・・？

cのコラムのタイトルに言う「最も近い他人」とはもちろん夫婦のことだが、本作ではパコ・ベア夫婦と、アレハンドロ・ラウラ夫婦の2組がメインで登場するから、そのタイトルは一体どちらの夫婦を指しているの？また、「スター夫婦」とはもちろん、ハビエル・バルデムとペネロペ・クルスのことだが、本作ではこの2人の男女スターが、それぞれ別の夫と妻を持ち、別れた昔の恋人同士という設定で登場する。そして、この2人が十数年ぶりに再会したところで、誘拐事件を契機として何とも生々しい人間ドラマが展開していくから、その一挙手一投足に注目したい。

cのコラムは堂々と(?)“捻破り”をしているが、私はここでネタバレ厳禁の“大ネタバレ”をバラすわけにはいかない。しかし、察しのいいあなたなら、映画を観なくてもここまで書けばラウラのあっと驚く“ある告白”の中身は理解できるのでは・・・？それにしても、昔から「知らぬは亭主ばかりなり」というわかったようなわからないような格言(?)があるが、本作の邦題『誰もがそれを知っている』(英題 EVERYBODY KNOW)とは何ともはや・・・。ちなみに、柳楽優弥くんが第57回カンヌ国際映画祭の最優秀男優賞を史上最年少で受賞した作品が、是枝裕和監督の『誰も知らない』(英題 Nobody knows) (04年)で、私は同作にも星5つを付けた(『シネマ6』161頁)。同作の『誰も知らない』というタイトルは、ソフトで人間性の尊厳に期待を持たせるものだが、他方、モチーフとなった「西菓鴨子供4人置き去り事件」の現実はしっかり考える必要があった。それと同じように、『誰も知らない』とは正反対の『誰もがそれを知っている』というタイトルの本作も、タイトルの意味をしっかりかみしめたい。

他方、なるほど、そういうテーマを描くのなら、舞台は『幸福なラザロ』と同じような片田舎がふさわしい。なぜなら、田舎では「ねえねえ、これは絶対秘密の話だけど・・・」で始まる噂話は概ね村人みんなが知っているものと相場が決まっているからだ。すると、ラウラの“ある告白”を聞いて、あっと驚いたのはパコだけ・・・？ひょっとして、村人は誰もがそれを知っていたの？

## ■犯人は誰だ！その説明は？■

1980年代に一世を風靡した横溝正史の小説を映画化した『金田一耕助シリーズ』は、シャーロック・ホームズや明智小五郎ほどスマートではないけれども、地道な証拠集めと卓抜した推理力で犯人を追い詰めていく金田一耕助探偵の奮闘ぶりが面白かった。また、前述した『64-ロクヨン-前編』、『64-ロクヨン-後編』や『ゲティ家の身代金』では、身代金の授受を巡る犯人側と被害者+警察側との息詰まる駆け引きが観客の目をスリ

リングに引きつけていた。しかし、同じ誘拐事件をテーマとしながら、本作では、犯人は誰だ？という知的興味と身代金の授受を巡る動的興味について、アスガー・ファルハディ監督は主要なテーマにしていらないから、それにも注目。そのため、犯人とラウラたちファミリーとの“接点”は基本的に2度のメールのやりとりだけで、“時間”の要素を含めて、その詳細は何もスクリーン上には登場してこない。ただし、犯人像がわからないままでは、ストーリーの完成度にケチが付けられる恐れがあるためか、アスガー・ファルハディ監督は後半のあるシーケンスで誘拐事件の犯人像をそれなりに描いてくれるので、それにも注目！

しかし、なぜこの犯人はこんな犯行を？それについては本作ラストである人物から語られそうになるが、私が5作連続して星5つを付けたアスガー・ファルハディ監督のこと。そんなヤワな演出はせず、ラストもあっと驚く演出で終わらせているから、それにも注目！なるほど、なるほど……。ここまで見事な脚本を書き、見事な演出をされると、当然本作も星5つに。

2019（令和元）年6月6日記